Market Eye

不安の種くすぶり、投資家に迷い

2009年6月19日（金）

第一生命経済研究所　経済調査部
副主任エコノミスト　人見 小奈恵
03-5221-4523

景気底入れ期待につながった米フィラデルフィア連銀指数

米国株式市場で、NYダウは４日ぶりに反発しました。前日までの３日間で300ドル近くも下落していたことから自立反発した面と、経済指標で好材料が出たことによる買い安心感が株式相場を支えました。

米新規失業保険申請件数は60.8万件（市場予想は60.4万件）でしたが、失業保険継続受給者数は668.7万人（市場予想は684.0万人）と22週間ぶりに減少、減少幅は2001年11月以来、最大でした。米６月フィラデルフィア連銀業況指数は▲2.2となり、業況判断の分かれ目であるゼロを９ヶ月連続で割り込みました。しかし、前月（▲22.6）からは大幅に改善しており、市場予想（▲17.0）も大きく上回りました。内訳を見ても、新規受注が▲4.8と前月の▲25.9から大幅改善、2008年9月の水準まで回復したほか、出荷も2.1と2008年5月以来のプラスでした。5月景気先行指数も前月比+1.2%と5年ぶりの高い伸びを示し、市場予想（+1.0%）も上回りました。マーケットではこれらの結果を受けて、景気回復期待が広がり、株高につながりました。

一方、米財務省は、来週実施する国債入札の金額を発表しました。23日に２年債400億ドル、24日に５年債370億ドル、25日に７年債270億ドルとなっており、総額1,040億ドルと過去最大規模になります。米国債券は景気後退リスクの低下と国債供給過剰懸念から売られて長期金利は上昇、ドル買いの流れとなりました。

相場を下支えしていた環境関連株物色に一服感

国内株式市場は、米国市場における景気底入れ期待の流れを受けて堅調にスタートしました。1ドル＝96円台後半まで円安が進んだことが株価にはプラス材料となったほか、外資系証券会社が銀行株の格付けを引き上げて銀行株が堅調に推移したことも相場を押し上げました。ただし、前場では一時9800円を超える場面もあったものの、その後は伸び悩む場面も見られ、週末要因も加わって上昇に勢いは感じられませんでした。最近、相場を賑わせていた環境関連銘柄が、過熱感などから今日は一転して軒並み下落して、利益確定売りやヘッジファンドなどによるショートの売りなどに押されました。環境関連株は最近の物色のテーマとなっており、中小型株が最近の相場を下支えしてきました。しかし今日は中小型株は相対的に軟調となっており、その一方で円高を好感した輸出関連や金融などの主力大型株が株価指数の上昇を支えました。米国、国内ともに株式市場は反発しましたが出来高は少なく、本日の株価上昇が本格的な景気底入れ期待を背景にしたものであるかというと疑問も感じます。環境関連株の大幅下落についても、特別な悪材料がない中、ポジションを手仕舞う動きが要因のひとつとなっており、投資家の迷いが窺われます。

来週行われる過去最大規模の米国債入札が市場関係者の関心を集めています。入札が順調に行われなかった場合は、長期金利の上昇につながる可能性があります。米国の長期金利上昇は米国景気に悪影響を与えるのみならず、日本の金利にも影響するため、国内景気にとっても米国の長期金利の動向には注視する必要があります。米長期金利上昇によって住宅ローン金利は押し上げられており、不安の種はくすぶっています。こうした不安材料が払拭されない限り、足元でのもみ合い相場はしばらく続きそうです。

以上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。